「北の祭司」

山本Q太郎

警察に聞かれても答えられることは多くなかった。

私はある製薬会社で微生物を研究している。ここ北海道の釧路湿原へは微生物の採集のために毎年調査に来ている。今年も調査のために釧路を訪れ、例年通り中岡さんにガイドを頼み研究・記録用の生体を採集するために湿原の奥まで立入った。中岡さんと一緒にカヌーで釧路川を降っている途中で熊に襲われた。私はとにかく必死に逃げることができたが、中岡さんは熊に襲われたと思う。

というのが三日前に私が出会った事件について説明できる全てだった。警察が知りたがっていることは二つ。中岡さんの遺体が見つかっていない。遺留品も探せていないらしい。もう一つ。湿原の地面はぬかるんでおり四足とはいえ成人男性を襲えるサイズの生き物が入れば歩き回ることもできずに沈んでしまう。だから熊が湿原の中まで入ってくるとは考えずらい。

「あんたが無事だったのはよかったけど、あんなところにまで熊が降りてくるんなら、しばらく川下りは中止せねばならなくなるんだわ」と聞き取りをしてくれた年配の警官は言った。

実際、私が襲われたのは熊ではない。だが、私が経験したことを話してもやはり信じてもらえなかっただろう。熊の方がまだあり得る。私が遭遇したものは人智の理解を超えた恐るべき存在だった。

もしかしたら思い込みかも知れない。何かの理由で一酸化炭素が溜まっている場所に入り込み酸欠症状で朦朧とし幻覚のようなものを見た。もしくは疲労のあまり繊毛状態に陥って、あるはずのないものを見てしまった。とか。できればそうであってほしい。あんなものがこの世に存在するなんて、常識的な人間であれば到底受け入れることができないだろう。そして、私もまた科学的な常識をよしとする研究者だ。できれば気のせいであって欲しい。しかし、あの時見た光景は今も鮮明に覚えている。一体何があったのか見たものをそのまま記そうと思う。冷静になって整理してみれば幻を見たという証が見つかるかもしれないし、中岡さんを探す手がかりがあるかもしれない。

釧路は寒冷で梅雨がない亜寒帯に属していて、その環境のおかげで湿原は世界から見ても特殊な生態系を作った。釧路湿原以外では見られない植生も多く固有種の宝庫だ。目に見えない微生物も珍しい種が多く発見されている。

三日前。六月中旬のその日は天気も良く北海道とはいえ上着を着ていると汗ばむ気温だった。茅沼（かやぬま）のカヌーポイントからカヌーで釧路川に入り採集ポイントに寄りながら川をくだっていた。中岡さんからは事前に、調査日はちょうど満月で水位が高いからいつもはいけないところにも入れるかもしれないがどうする、と聞かれていた。反対する理由はない。行ったことがない場所なら新しい発見があるかもしれない。そんな機会を逃すはずは無かった。というわけで今年はいつもより深く湿原の中に入ることができた。中岡さんの先導で支流に入り奥へと進んで行く。ただでさえ人が立ち入れない湿原のさらに奥。長年ガイドをしている中岡さんでも初めてという場所をカヌーでゆっくりと進んでいた。研究結果に結びつくとは限らないが、冒険心は高まり興奮を抑えられなかった。植生は見ただけでは他の場所と違った様子は無かったが、ところどころでカヌーに乗ったまま採集をした。仕事に夢中になっていたがおかしなことに気がついた。いつの間にか周囲にはワインのような甘い匂い漂っていた。気のせいかと思ったが匂いは次第に強くなってくる。

「いやー、なんだべか。俺も湿原に入って長いけどこんな匂いは嗅いだことがないなあ」と中岡さんも不思議がっていた。

「何か果物でも腐って発酵しているんじゃないですか」

「どうだかね。湿原じゃ根を張れないからとてもじゃないけど果物をつけるような樹は育たないはずだけどね」

釧路湿原は寒さで枯れた葦（ヨシ）を分解する微生物がいない。そのため枯れた葦が土にならず何世紀にも亘って積み重なり続けている。湿原全体が水に浸った枯れた葦のスポンジのような状態になっている。底なし沼のようになっていて、人が入るとそのまま沈んでしまうだろう。

中岡さんのいう通り見渡しても果物がなるような大きな樹は見当たらない。不思議なこともあるものだと笑っていたが、いつしか採集に夢中になってそのことは頭から抜けていた。

「先生、そろそろ時間になるけどまだかかりそうかい。もしかしたら、天気が崩れるかもしれないから、戻れるなら戻ったらいいかもしれないね」と中岡さんに声をかけられ我に返った。見上げると空には雲がか

かり初め、肌寒くなってきた。日の入りにはまだあるが、こんなところで無理をして何かあったら面倒だ。

「そうですね……」

当初の予定はこなしており、追加の採集はついでのようなものだからきりはない。中岡さんに戻りましょうと伝えた。カヌーを反転し中岡さんの後をついてオールを回す。あたりは恐ろしく静かだ。オールが水面に触れる音、風が葦を揺らすサラサラという音、飛び回る虫の羽音。今までの生活がどれだけ人工の音に囲まれていたか思い知らされる。時間と空間が本来持っている動物的な感覚に戻ってゆくようだ。陽は傾き広い空一面が赤く染まる。そして、甘い匂い。思わず「中岡さん」と声を上げる。振り返った中岡さんは目を見開いていた。

「先生、流されてる。カヌー漕いで、離れないように。川が、流れが逆流しているみたいだ」と慌てた様

釧路川は茅沼周辺から二千キロ以上離れた屈斜路湖（くっしゃろこ）を源流として太平洋に流れる大きな河川だ。私たちが入り込んだのは支流に位置する巨大な沼地だ。川の側の低地に水が溜まり沼となっている。そこに群生している葦や菅（スゲ）の隙間の通りやすい場所を水路として移動している。ただ水が溜まっているだけだから流れがある場所ではない。それなのに水が何かに吸い寄せられるように流れている。ちょっとでも気を抜くと流されてしまうほどの勢いだ。どこに流されるのかわからない。後ろを振り返る余裕も無く必死にオールを漕いだ。すぐにあたりは暗くなってきた。いつの間にか周囲には霧も出てきて私たちを包み込んだ。美しかった夕日は雲に覆われ焦げ落ちたように急速に暗くなったていく。霧は時間を追うごとに濃くなり数メートルしか離れていないはずの中岡さんの背中すら見えなくなった。乳白色の暗闇の中を必死にオールを漕いだが、もはやカヌーが進んでいるのか流されているかもわからない。周囲の甘い匂いは果物が腐敗したような強い刺激臭となり呼吸が苦しい。覚えていたのはそこまで。必死にオールを漕いでいたあと覚えているのは、カヌーの上で目が覚めた後だった。

夢を見ていた。口の中に甘い団子の味が広がる。甘いタレのからんだみたらし団子だ。子供の頃に大好きで買い物について行ってはねだって買ってもらった。うふふ、あんた本当にお団子が好きなんだね。母の温もりと甘い匂い。おかえり達也。私の名前だ。兄にはお兄ちゃん。私のことは達也と呼んだ。達也、随分遅

かったね、お団子買ってあるから炬燵に入って待ってなさい。まだ病みつく前の母の言い方だ。病気になってから母はごめんねごめんねとしか言わなくなった。忘れていた幼い頃の記憶。まだ何も知らない頃。疲れも不安も恐れも経験していない頃。あらゆることが不思議で知ることが楽しかった。思えばあの時が一番幸せだった。欲しいものは母が与えてくれた。動物図鑑も虫眼鏡も。困ったことがあれば母がなんとかしてくれた。母の乳房から出る甘い乳の味。世界で一番安心できる腹の中。温かい羊水に浮かび子守唄が響いてくる。この歌は覚えている。赤ん坊の時に歌ってくれた歌だ。そして、笑い声。母は寝たきりになる前は、よく笑う人だった。

風が強く吹いていた。寒さで目が覚めた。さっきまで必死にカヌーを漕いでいたのに気づけば突っ伏して寝ていた。意識を失っていたようだ。カヌーは枯れた葦の草むらに乗り上げている。風が吹く音と腐敗した強い匂い。葦がガサガサと揺れている。起き上がって驚いた。周囲には動物がびっしりと集まっていた。中岡さんのカヌーも側に乗り上げていたが中岡さんは見当たらなかった。恐る恐る周囲を見渡すと小高い丘に乗り上げているようだった。その丘が明るく照らされ始めた。見上げると渦を巻く雲の真ん中から光が射してこの島のような場所を照らしている。雲の中心に空いた穴は少しずつ広がって、大きな満月が現れた。丘を照らす月明かりは明るさを増してゆく。上空では夥しい数のカラスや大小さまざまな鳥たちが旋回している。

明るくなった丘の周辺には何十何百頭という無数の生き物。狸や狐だろうか。薄闇に紛れているが夥しい数の目が光っている。栗鼠のような小さいものもいるようだった。蝦夷鹿（えぞしか）も群れをなしていた。蝦夷鹿の体重は本州に生息する鹿の三倍になることもある。蝦夷鹿と交通事故を起こすと車も無事では済まない。二メートルにもなる蝦夷鹿たちが群がり一点を見つめいた。

その先には黒い大きな毛の塊。身の毛がよだつ。北海道に生息しているのはヒグマだ。オスのツキノワグマは大きくても百二十キロくらいだが、ヒグマは五百キロになる個体もある。熊の中でもヒグマは別物だ。しかも全体が見えていないのに背丈が蝦夷鹿の何倍もある。月の光が照らす巨大な丸い黒い毛の固まり。すぐに逃げるべきだったが足がすくんで動かない。ヒグマのような黒い毛の塊はゆらゆらと揺れだし周囲の動物を襲うかに見えたが、細かく発作的に震えたかと思

うと甲高い音を発した。耳が聞こえなくなる。頭が割れるように痛い。動物たちは驚いた様子もなく陶酔しているようにそれを見上げ立ちすくんでいる。

こんな人しれぬ場所で、夥しい数の野生の動物が集まり何が起ころうというのか。耳を押さえ逃げる先を探した。オールは手の届くところにある。中岡さんが気がかりだった。風の向きによって甘い匂いが漂ってくる。それは真ん中にいる黒い毛の塊が発している気がする。甲高い鳴き声がいっそう高く響いた時に黒い毛の塊がある上空にピンクの光が滲み出した。空中からピンクの液体が染み出しついに噴き出すように溢れ出した。そのままピンクの液体は黒い毛の塊の上に降り注ぐ。動物たちは引き寄せられるように黒い毛の塊に群がり、毛に垂れたピンクの液体を我先にと舐め始めた鳥や虫たもたかっている。黒い毛の塊は瞬く間に、野生の動物が群がってできた山のようになった。

一体何が起ころうとしているのか。ただ一つ言えるのは動物も私と同じ気持ちだろうということだ。あの液体が発している甘い香りはますます強くなる。私自身あの液体を舐めたい衝動を抑えるのに必死だった。あの甘美な匂いを発する液体を口にふくみの見下したい。その幸福な喜びを知っているような気がした。恐ろしさと甘美な誘惑の間で心は平静さを失っていた。私はなんとか自分を取り戻しカヌーにとどまることができた。なぜなら、あの甘美な蜜漬けの毛の塊に群がる動物たちの中に中岡さんを見つけたからだ。鹿を押し除け、蜜を吸おうと必死だった。それは恐ろしい光景で、私の自制心を呼び起こすのに十分な奇怪さだった。

上空から滲み出るピンクの甘い蜜は勢いをまし周囲に降り注いでいる。その恐ろしさをどう書き記せばいいかわからない。恐ろしさに足がすくんで力が入らなかった。見入っていると、今度は獣が吠えるような深い鳴声が響いた。動物たちの山が揺れたかと思うと黒い毛の塊が宙に向けて伸び上がった。あれは熊などでは無かった。きっと人類が知り得るものではないだろう。あれはピンクの透明な蜜が服出している空中のある一点目掛けて立ち上がった。毛の塊からは、細くふしくれだった赤黒い脚が無数に伸びている。丸い毛の塊はその無数の脚で立ち上がり何メートルもの上空に聳え立った。あまりも非常識な光景で、何が起こっているのか理解している自信はない。しかし、それが正に私が見たと思っている光景だった。高く伸びた無数の赤黒い脚に支えられた毛の塊から今度はたくさんの赤い色をした紐がスルスルと伸びてきた。赤い紐はし

なやかに揺れたかと思うと、甘い蜜に群がっている動物たちに向かって伸びその体を貫いては、上空のピンクの蜜が噴き出す場所に押し込め始めた。

私は覚悟を決め、悍ましい光景に背を向けオールを握りカヌーに飛び込んだ。耳元でひゅっと風を切る音が聞こえた。背中を何度も強く打たれたがカヌーにしがみついて耐え、その場から逃げることだけを考えた。中岡さんのことは一瞬頭をよぎったが私にはどうすることも出来ないと思った。その後のことはよく覚えていない。とにかくアレに背を向け必死にオールを漕いだ。幸い逆流は治っており引き戻されることはなかった。どれくらい漕いだだろうか。気がつけば釧路川の本流に辿り着き、カヌーで川下りを楽しんでいたグループに助けを求めることができた。

救急車を呼んでもらいすぐに病院に運んでもらった。背中に怪我をしており出血も激しかったせいか意識を失ったらしい。起きると警察の人が来ていたので中岡さんとはぐれたことを伝えた。場所も伝えた。もし、あれがまだいたらどうなるか悩む部分もある。しかし、あれが現実とも限らないし、中岡さんが助かるには警察に頼るしかなかった。

意識を取り戻したのは湿原の奥で襲われた翌日だった。オールを強く握りしめたせいか手は血豆だらけになっていた。腕は重くこわばりまだ上がらない。背中にはいくつも深い裂傷を負っていた。あの動物を襲った紐に打たれたところが裂けていたようだ。これは熊に襲われたと言うしかない。中岡さんの捜索はまだ行われているが手がかりは見つからないらしい。残された家族に何を伝えるべきか退院するまでに決めなければと思う。

これが、あの日私が体験したと思ったことだった。一体あの日、あの場所で何が起こったのか考えずにいられない。何度も考えたが結論はいつも同じ。

「早く忘れよう」だ。

これを書き記し、どこか目のつかないところにしまい込んだら忘れよう。私なんかの手に負えることではない。湿原のあんな奥に行く物好きもいないだろう。行ったとしてもあれが確証はない。現に警察は周囲を調べているが、おかしなものが見つかったという話も聞かない。興奮していただけで本当に熊に襲われていたのかも知れない。中岡さんには成仏して欲しいが、いずれにしろ忘れる以外にできることはないと思う。